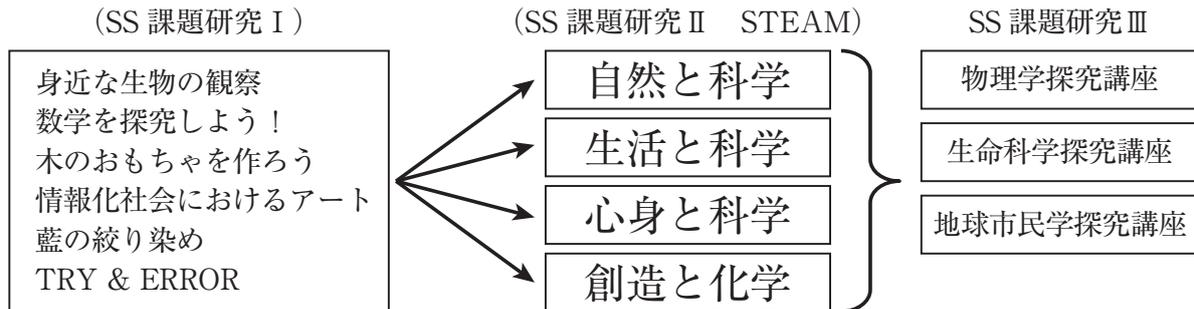


研究開発実施上の課題及び今後の研究開発の方向・成果の普及

三小田 博 昭

1 研究開発実施上の課題

(課題1) 中高6年間を通して行う第3期SSH課題研究の系統的な枠組の確立



H28年度は、SS課題研究 I、SS課題研究 II（高校1年生）、SS課題研究 IIIの枠組みを確立させ試行した。H29年度以降は、SS課題研究 II STEAM（高校2年生）での探究活動を行う。SS課題研究 II STEAM（高校2年生）は9名の教員が120名の生徒の課題研究を同時に担当する。実際の授業時間割にSTEAMをどのように落とし込むかといったテクニカルな問題点や120名の生徒をどのように9名の教員に割り振るのかといったカリキュラムマネジメントの問題点もある。また、研究成果を論文にまとめるのだが、授業時間内に論文を完成させるように指導する時間的な課題もある。

本校はH27年度からSGHを全校生徒対象に実施している。SGH課題研究とSSH課題研究が相関的に関わることで文理融合型の課題研究を行うことができ、研究内容がより深まる。SGH課題研究とSSH課題研究を効果的に一体化させる研究方法を次年度以降、試行錯誤して実践する。

(課題2) 協同的探究学習を学校カリキュラム全体へ拡大する取組の開始

第2期SSHでの成果を受け、H28年度は、文系教科や実技教科にも協同的探究学習を取り入れる試みを開始した。H28年度は、中学では社会、英語、国語、美術で試行した。H29年度以降は、高校のカリキュラムの文系教科・実技教科に協同的探究学習をどのように取り入れるかが課題である。また、SS課題研究 I・II・IIIに「協同的探究学習」を効果的に取り入れることも課題である。これまでSSH校として、既存教科の中で実践し、評価方

法を開発してきた「協同的探究学習」をSS課題研究の中に効果的に取り入れることができれば、既存の教科での学びを統合し、SS課題研究での探究をさらに深めることができるからである。また、逆にSS課題研究で行う「協同的探究学習」の成果が教科での学びに再び還元され、相互に作用しあうことで、螺旋的に生徒の主体的な学びが進化することも考えることができる。

(課題3) 第3期SSH研究開発を評価するアンケート尺度の分析

H28年度は、「生徒の意識を測る調査」と「生徒の思考力を測る調査」に関して、新たなアンケート尺度と記述型課題を作成した。生徒につけさせたい4つの力を測るためアンケート調査（A《多様な既有知識を関連づけて、学習した内容と実生活を結び付けて考える力》、B《課題の本質を理解し、柔軟な思考の枠組みを創造する力》、C《自ら設定した課題について主体的に探究する力》、D《判断した根拠や因果関係について自分の考えで説明する力》の相関関係を求めること。

次に、生徒のSSH活動実績とABCDの力の関係や、GTECで測定した生徒の英語力との関係も捉えて行こうと考えている。可能ならばSGHで付けさせたい力との関係も測っていきたい。

また、3期SSHで、生徒の「思考過程を測る調査（本校の基準による、生徒の認知的側面の調査）」の記述型の評価課題を作成した。その課題を実際に試行することがH29年度の目標であり課題である。第3期SSHは、教科を統合した深い理解に関するコンピテンシーを測る課

